

## 日台の若者はどのように手を携えて地方文化と革新的発展を探索するのか？2025年冬季基隆八斗子地方創生ワークショップを例として

学校 | 国立台湾海洋大学、高知大学

著者 | 楊名豪、黃昱凱、赤池慎吾、曾聖文、呂亭亭、蔡宛廷、陳泓仁

### 一、はじめに

都市化が加速し地方文化が徐々に失われつつある潮流の中で、若者たちはどのように実地体験を通じて地方との絆を再構築し、地域への理解を深めていくのだろうか。地方創生の実践方法と地域とのつながりの可能性を模索するため、国立台湾海洋大学(以下「海大」という)と日本の高知大学が連携し、台湾北部の基隆市に位置する八斗子を拠点とした実習ワークショップを共同で企画した。2025年2月9日から16日にかけて、「2025年ウインター地方創生ワークショップ(Regional Revitalization Winter Workshop 2025)」が基隆八斗子地域において開催された。このイベントは地方創生を軸に据え、台湾と日本の学生たちが現地調査や地域住民との深い交流を通して、若者の視点から異文化間の理解を深めながら、創造的な地方発展の提案を試みる取り組みであった。

今回のワークショップは海大と高知大学の長年にわたる協力関係にさらなる実践的成果をもたらすものとなった。国際的な文化交流と地域での深い取り組みを通じて、本活動は学生たちが言語と文化の壁を乗り越え、実際の行動を通して地域社会に積極的に関わっていくことを目指している。

本ワークショップには計9名の学生が参加し、海大からは輸送科学学科、海洋文化創造デザイン産業学士学位課程、海洋法政学士学位課程、海洋観光管理学士学位課程の学生が、また日本からは高知大学の農林海洋科学部と地域協働学部の学生が集結した(図1参照)。ワークショップのテーマは基隆の漁村である八斗子地域を中心に展開され、異文化交流、インタビュー調査、体験活動、およびPBL(課題解決型学習)を通じて進められた。現地住民へのインタビューおよび地域との交流を核として、学生たちは共同で八斗子の文化的特徴と将来の発展可能性について多角的に探究した。



図1：開会式で記念品を交換する日本と台湾の学生たち

## 二、実地調査と現地観察

### (一) コミュニティの文化的記憶と生活体験

本ワークショップのフィールドワークは2月10日に開始され、最初に現地の杜劍秋里長が学生たちを八斗子地域へ案内し、住民との交流の場を設けた(図2参照)。里長は八斗子地域のコミュニティ特性と発展の歴史について解説し、地元の水産漁業や咕啞石(クロイシ)建築(図3参照)、特徴的な地形などを紹介しながら、学生たちが八斗子の文化的背景と産業構造について基礎的な理解を深められるよう導いた。住民へのインタビュー調査では、学生たちは数多くの地元住民から貴重な話を聞く機会を得た。インタビュー対象者には、長年漁業に従事してきた林福蔭さん、文化保存活動に尽力している許焜山さん、最後の海女世代として知られる杜薛寶桂さん、そしてコミュニティ開発を積極的に推進している黄明和理事長などが含まれていた(図4参照)。これらの住民との対話を通して、学生たちは八斗子の伝統産業と文化的背景についてより深い洞察と理解を得ることができた。



図2：杜劍秋里長が台湾と日本の学生を八斗子コミュニティ巡りに導く



図 3：咕啾石垣を踏査するために八斗子の路地に訪れた



図 4：台湾と日本の学生が八斗子の住民にインタビュー

話を聞くだけでなく、学生たちは住民の日常生活にも積極的に参加した。インタビューや日常的な会話を通して、教師と学生たちは地元住民とお茶の時間やカラオケ交流、テーブルゲームなどのリラックスした雰囲気の中で、短い時間で地域生活に溶け込み、八斗子の住民たちと家族のような緊密な絆を育んでいった。このように住民同士の深いつながりを観察し実際に体験することで、後の地方創生提案に向けた貴重な知見と素材を蓄積することができた。

## （二）海洋産業と食魚教育

基隆区漁業協同組合が共催した「食魚教育」コースでは、学生たちは地元の新鮮な食材を活用した伝統料理の調理体験に参加した。豊富な実務経験を持つ地元シェフの熟練した指導のもと、学生たちは漁港でよく見られる魚種の適切な処理方法と多彩な料理への応用について学んだ。さらに、八斗子を代表する特色料理である三杯小卷(ごま油、しょうゆ、酒の 3 つの調味料で味付けするイカの炒め物)と海鮮焼きそばの調理技法がその場で実演され、学生たちは伝統的な食文化への理解を深めた。学生たちはグループに分かれて実践的な調理に取り組み、実際に

料理を作る過程を通じて八斗子地域の特色ある水産物について知識を深めた。この体験により、彼らは漁業と地域の日常生活との密接なつながりをより深く理解すると同時に、海洋資源の持続可能な利用に対する意識も高めることができた(図 5 参照)。



図 5：八斗子の食魚教育コースで調理体験に参加する台湾と日本の学生たち

### (三) 伝統技術の継承と変容

地元のトビウオ卵ソーセージ産業を営む陳良輔理事長は、トビウオの卵の伝統的な漁法や精緻な処理方法、さらには貴重な卵をソーセージへと加工する手作りの工程について、惜しみなく詳細な知識を学生たちに伝授した(図 6 参照)。この製品は八斗子特有のトビウオという水産資源と伝統的な加工技術を巧みに融合させたものであり、地元産業の革新的な転換を象徴するだけでなく、地域経済の発展を促進するためのコミュニティ住民による創造的かつ主体的な取り組みの成果でもある。八斗子産業観光促進会の協力のもと、学生たちは「薯榔」(ソメモノイモ)という地域固有の植物を用いた海水染めの技法を学び、その染色技術が現代の布製品創作にどのように応用されているかを体験した(図 7 参照)。また、「扒手網」と呼ばれる八斗子の伝統的な漁法を実際に操作することを通して、伝統技術の現代における変容と継承の姿を肌で感じ取った。学生たちは現場見学と積極的な質疑応答を通じて、八斗子の海洋関連産業についてより具体的かつ深い理解を得ることができた。同時に、伝統的な技術や知恵が現代社会においていかに継承され、新たな形で変容しながら生き続けているかという文化的価値を実感する貴重な機会となった。



図6：台湾と日本の学生がトビウオ卵ソーセージを手作り体験



図7：台湾と日本の学生が植物染めイベントを体験

深い体験を通して、学生たちは八斗子の産業発展と豊かな文化資源を理解だけでなく、地域住民の郷土への深い愛着とアイデンティティ、そして住民同士の心の絆を肌で感じ取ることができた。彼らはこの地に息づく物語と誇りを、自分たちの心に刻み込んだのである。また、住民との心のこもった対話を通じて、学生たちは八斗子が現在直面している切実な課題—「若者の流出」という地域社会の存続を脅かす問題の深刻さを肌で実感することとなった。地域産業の衰退により、八斗子地域では地元での雇用機会が著しく減少しており、多くの若者は生計を立てるため日々台北との間に往復する生活を強いられている。さらに深刻なことに、将来に希望を見いだせない若者たちはすでに都市部へと完全に移住している現状がある。これにより、地域の人口構成は著しく高齢化し、伝統産業は日に日に衰退の一途をたどっている。さらに憂慮すべきことに、何世代にもわたって受け継がれてきた技や生活文化の記憶が、継承者を失い、静かに消えゆく危機に直面しているのである。豊かな文化と独自の歴史、そして他に類を見ない特色ある産物を有しながらも、若い世代の流出により、八斗子が持つ潜在的な魅力と可能性は、それを活かし

育てるべき若い力の不在によって、十分に花開くことなく眠ったままの状態が続いているのである。

集中的な実地調査と綿密な現地観察を通じ、学生たちは八斗子地域に眠る豊かな文化的資源と現在直面している切実な課題を発見することとどまらなかった。初めてこの地に足を踏み入れた若き探求者として、彼らは「知る」だけでなく「行動する」という次のステップへの橋渡しを模索し始めた。

### 三、活動成果と意義

#### (一) 活動の成果

学生たちは最終成果発表会において、八斗子で行ったフィールドワークと深い文化理解の成果を共有した。特徴的な咕硯石建築の歴史的価値から、今や消えゆく運命にある貴重な海女文化まで、彼らは八斗子の豊かな歴史的背景と地域全体を結ぶ複雑な文化的つながりを、詳細かつ生き生きと描写した(図8参照)。学生たちはこの活動を通じて、単なる文化の観察者や体験者という枠を超え、地域の未来を共に創造する地方創生の積極的な参加者としての役割を担うことにも挑戦した。



図8：学生が八斗子の住民に対して発見を説明している

八斗子の将来の可能性を探求する過程で、学生たちはコミュニティ固有の特徴と、彼ら自身が持つ異文化間の若者視点を巧みに融合させた複数の斬新なアイデアを創出した。彼らの綿密な観察と積極的な地域参加の経験を基盤として、地域が直面する諸課題に対応する革新的な提案を次のように展開したのである。

①、家庭や学校、職場とは異なる「第三の場所」をデザインし、高齢者、若者、旅行者が共に集える複合的な活動空間を創出する。この空間には交流エリア、娯楽施設、小規模なワークショップスペース、地域の文化商品の展示コーナーなどを設け、世代や背景の異なる人々の自然な

交流を促進する。これによりコミュニティの結束力を高め、人々の社会的つながりへの期待に応えながら、包括性と活力に満ちた新たな公共空間を形成する(図9参照)。

②、地域の特色を凝縮した親しみやすいご当地マスコットキャラクターを創作し、それをモチーフとした魅力的な文化商品をデザインし、地域のアイデンティティとイメージの認知度を高めること。

③、地域の多様な産業の特徴を効果的に組み合わせ、ガイド機能と季節ごとのおすすめ散策ルートを盛り込んだ魅力的な広報資料を制作する。これにより訪問者は八斗子の隠れた魅力を効率的に発見できるようになり、地域観光産業の活性化と持続可能な発展に貢献することが期待できる。

これらの提案は、学生たちが観察内容を具体的な行動計画へと変換する能力を明確に示しており、コミュニティが直面している実際の課題に対して実現可能な解決策を提示している。これは、本ワークショップが参加と対話を出発点とし、異文化間の深い対話と創造的思考を通じて具体的な行動へと発展させるという実践的精神を如実に示している。



図9：学生が八斗子の住民に「第三の場所」のアイデアを提案

## (二)活動の意義—学生の自己評価アンケート結果

本ワークショップは台湾と日本の若者が異文化間の視点で地域を再発見し、地方創生の多様な可能性を共に描き出す貴重な機会となった。ワークショップは「参加し、感じ、行動する」という三層構造の実践プロセスを通じて、学生たちが単なる観光客や受動的な観察者の枠を超え、地域の未来を共に創造する積極的な担い手へと成長する機会を提供した。住民へのインタビュー、伝統技術の体験、現地料理の実習を通じて、学生たちは八斗子との真摯なつながりを育み、地域文化の保存と革新的発展への具体的な提案を行った。

このウィンターワークショップが学生の能力に与える影響を詳細に把握するため、高知大学の赤池慎吾教授の協力を得て、主催者は活動の開始時点と終了時点において体系的な自己評価調査を実施した。アンケートは5つの能力指標をカバーしており:A. 人にまみれる力、B. 掘り下げる力、C. 行動を起こす力、D. 共に創る力、そして E. 経験に学び、伝える力が含まれている。台湾の学生4名が事前・事後テストを完了し、全体として、すべての指標が活動後に向上しており、活動が学生の学習成長にポジティブな影響を与えたことを示している(図10参照)。

特に D.共に創る力と E.経験に学び、伝える力の二つの指標において、学生の自己評価は顕著な向上を示した。「他者と議題について討論し、双方が一致/相互理解に達するまで続けることができる」、「成功と失敗から学ぶことができる」、そして「学んだ内容を書面で表現し、他者とコミュニケーションを取ることができる」という三つの能力において、学生たちはより高い自己肯定感と進歩の幅を示した。これは、本ワークショップを通じて異文化間チームワークと実地参加などの経験により、学生たちが対人関係と知識の転化の面で進展があったことを示している。

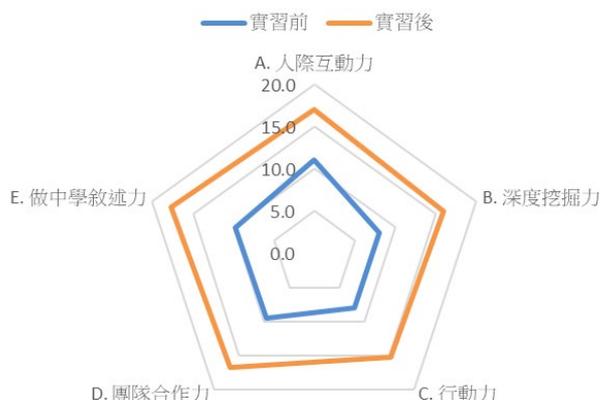


図10：学生の自己評価アンケート結果

さらに、自由記述式のフィードバックでは、多くの学生がワークショップでの振り返りと学びの感想を共有した。その中には「地域とのつながりにより深く注目するようになった」、「異なる文化に対して友好的な態度で接し、多様な文化的背景からの思考様式を尊重するようになった」、「実践的な活動を通じて地域の文化的特徴を直接体験し、過去と現在の発展の軌跡を知ることができた」、「地域の特色をより多角的に観察し理解する視点が身についた」などの声が寄せられた。これらの声は、学生たちが異文化理解と対人関係構築の能力において顕著な向上を遂げただけでなく、地域観察の鋭さと文化的感受性においても大きな成長を遂げたことを示している。さらに、このワークショップが学生の文化理解を深め、地域社会への積極的な参加意欲を高めると同時に、彼らの学習への熱意と自己認識能力を効果的に刺激したことを明確に表している。

#### 四、結論と省察

8日間の集中的な現地訪問を通じて、学生たちは八斗子の豊かな文化と歴史を学んだだけでなく、地域住民との心のこもった交流を重ねることで、この地が直面している深刻な人口流出問題、

産業構造の転換の必要性、そして文化の保存といった切実な課題について、より深く多面的な理解を得ることができた。

「地方創生」について、日本の学生は人と人との情緒的なつながりに注目し、台湾の学生は地域の特色の発信・推進に重点を置いていた。学生たちは何度も意見を交わす中で互いに刺激し合い、チームの視野を広げるとともに提案の革新性を高めることができた。

学生たちが成果発表会で提案した内容は、コミュニティ空間の活性化、地域ガイド体験の計画、特色ある文化創造商品のデザインなど多岐にわたり、これらはすべて八斗子コミュニティでの実地観察とインタビューから着想を得たものである。台湾と日本の学生が持つ地方創生に対する多様な視点を融合させることで、独創的な提案が生まれた(図 11 参照)。これらの提案は八斗子の現状への対応策であるだけでなく、若者が公共課題に対して抱く責任感と行動を起こす可能性を示すものでもある。



図 11：ワークショップの成果発表会